

## 夏目漱石におけるアジア

——《朝鮮観》を視座として——

三 谷 憲 正 \*

### はじめに

(1) 対象を捉えていない「研究」とは

1992年10月13日付の『京都新聞』（朝刊）に「日韓 厚い壁相互理解」という見出しで「日韓合同歴史教科書研究会」に関する紹介記事が掲載されている。これは日本の高校の日本史教科書をめぐっての会議であるが、この中で特に興味が引かれるのは日本側の代表者の「韓国側が日本の教科書を読んでいないのに気付いた」という一節である。「教科書」に関する「研究」会において、その「研究」対象であるはずの「教科書」を読まずに討議に参加し、且つ一つの主張をなし得る、というのは一体何なのであろうか。あるいはまた、朝鮮の民芸に強く魅せられ、日本の侵略に反対した「柳宗悦」に対して、「評価すれば日帝支配の歴史をゆがめる」という意見もあるのだという。無論新聞記事なので、間接的なエピソードにしか受け取ることはできない。

がしかし、「韓国的」発想の特徴をよく示している挿話のように思われる。日本＝加害者＝悪、であり、一方、韓国＝被害者＝善、というお定まりの図式である。特に「被害者」であることを、自らの依って立つ根拠として、言わば〈絶対化〉したとき、全ての学問・研究は出口無き陰路に入り込むことになる。なぜなら、その世界においては〈結論〉はあらかじめ決せられているからだ。一資料をその最深部の根底にまで遡って読もうが、文字面をたどろうが、この世界にあっては、同じことを意味する。行き着く〈結論〉は所詮同一なのだから。この点が、韓国側の問題点であると思われる。

では日本側ではどうであろうか。あるガイドブックには「韓国人の呼び方は？」について「氏は男にも女にも使えるが、『朴氏』という日本での『朴さん』よりやや

\* 佛教大学総合研究所嘱託研究員

かしこまった感じがある。」と紹介している<sup>1)</sup>。文章語としては別だが、日常的な会話の中で、試みに韓国人を姓にのみ氏をつけ、たとえば「金氏」と呼んでみるがいい。笑い出されるか、不快な顔をされるか、そのどちらかがおちだろう。ことはなにも一知半解のガイドブックに限らない。次は『漱石全集』第8巻『満韓ところどころ』の「注解」である。

韓国 明治二十八年清国から独立して同三十年国を韓と呼び、同四十三年わが国に併合後朝鮮と称し、第二次世界大戦後わが国の手を離れ、現在は北部を朝鮮民主主義人民共和国、南部を大韓民国と呼んでいる。

あたかも物であるかのように、「わが国」に「併合」されたり、「わが国の手を離れ」たり、といった言い方を問題にしているのではない。問題は「清国から独立」という見方である。これを韓国の人に示してみると、十人中十人までが否定するのではなからうか。それとも「李氏朝鮮」は清国の版図の一部だったのだろうか。

恐らく、ここには「西欧」の文物にのみ熱心であり、近隣諸国への無知と無理解がその根底にあることは確かなことだろう。それを日本の慌ただしい近代化の過程の産物と言うことはたやすい。しかし、このような「西高・東低」の認識のレンズはそろそろその倍率を設定し直す時期であるとおもわれる。

## (2) 先行研究について

漱石のアジア観を知る手がかりとして、これまで『満韓ところどころ』（『東京朝日新聞』では明42.10.21より同.12.30<sup>2)</sup>まで）が取り上げられてきた。この紀行文に対しては、従来から、所謂「帝国主義」的な態度であるという否定的な見方と、また一方リアルに見るべき事実は凝視しているという評価の仕方が、それぞれなされてきた。

前者の例としては、例えば、中野重治の「漱石以来」（『アカハタ』1958.3.5）が挙げられよう。

漱石のような人のなかにもあつた中国人観、朝鮮人観、それが、ごく自然に帝国主義、植民地主義にしみていた（略）。ごく自然にというところが肝腎のところだろう。何とも思わずに、中国人を、あの漱石のような人が「チャン」と書いてはばからなかつた。

以後このような論調の延長線上に、針生一郎「明治文学における自我と民衆」（『文

1) 『ブルーガイド海外版』（1980.4. 実業之日本社）。但し現在は絶版のようである。

2) 『大阪朝日新聞』では明治42.10.22より同.12.29までである。両新聞とも伊藤博文の死亡記事で一時中断をしている。

学』1976.7.), 檜山久雄『魯迅と漱石』(1977.3. 第三文明社), 朴春日『近代文学における朝鮮像』(1969.11. 未来社), さらに近年では友田悦生「夏目漱石と中国・朝鮮」(『作家のアジア体験』1992.7. 世界思想社)などが続いている。

これらの中で特に朴春日氏の批判は痛烈である。

もはやここには、日本帝国主義のアジア侵略にたいするひとかけらの批判も反撥も存在しないばかりか、むしろ圧迫民族の「高等遊民」としての漱石、その誇りと自信たっぷりな「大国意識」の上にあぐらをかいた「蔑視」の目だけが光っていたのである。資本主義の社会の俗悪さや倫理観を「江戸ッ子」的な正義感や潔癖さで批判し、やゆることはできても、帝国主義の本質をとらえることのできなかった漱石の一つの限界がはっきりとうかびあがってくるのはこのためであろうか<sup>3)</sup>。(傍線引用者、以下同じ)

先の中野重治の批判といい、この朴春日氏の全否定といい、ある一定のパターンがあるように思われる。「チャン」という言葉を使っているから、という観点。あるいはまた、“八百屋”へ行って“魚”を求め、売っていないと怒り出す客に似た立場。これらの評価の仕方の奥底にはある重大な何かが潜んでいるのではなからうか。

また、もう一方の流れとしては、猪野謙二「夏目漱石」(『明治の作家』1966.11. 岩波書店), 米田利昭「漱石の満韓旅行」(『文学』1972.9.), 同「漱石における大陸放浪者たち」(『日本文学』1976.7.), そして伊豆利彦『『満韓ところどころ』について』(『文学における日本と中国』1986.10. 汲古書院)などがある。

これらの中で、例えば伊豆利彦氏は「西欧のアジアに対する『帝国主義的優越感』に対しては強い反感を示した漱石も、日本のアジアに対する植民地支配には鈍感で、自分もまた『一種の帝国主義的優越感』にひたっていたのであろうか。」(四)と疑義を呈した上で、次のように述べている。

漱石が見るべきもの見、考えるべきことを考えたとしても、それを率直に表現することは難しかったと思われる。(略)しかし、よく読めば、この中途半端な作品からも、漱石のリアルな認識は所々すけてみえる。(五)

として、大連の「化物屋敷」や旅順の風景の叙述を引き合いに出している。

以上二つの論の流れを概観してみたが、これらの論は、一部引用という形でしか論じられて来なかったため、どこを照らしだし、どこに力点をかけるか、によって、その結論が異なって来たように見える。従って、本稿では『満韓ところどころ』を始め

3) 但し引用は『増補 近代文学における朝鮮像』(1985.5.8, 未来社)による。

として、日記、書簡、およびその他の作品にまで、その範囲を広げ、『漱石全集』<sup>4)</sup>中より、〈朝鮮〉に言及している箇所を全て抜き出し、その使われ方から考えることにした。

## 1. 「満韓の文明」もしくは「満韓視察」

ところが、ここに「満韓の文明」あるいはまた「満韓視察」と題された、一文書が出て来た。この一文の存在を不問に付しては、漱石の所謂“全発言”を網羅したことにはならない。このテキストが何故今（1993年10月現在）まで『全集』に収録されなかったか、は一つの不思議である。その経緯は後に譲り、先ずはこのテキストを読みたい。なお、ここでは『大阪朝日新聞』（明42.10.18付）を、引用という形で翻字する。原文の総ルビはぱらルビに、旧字体は新字体にそれぞれ改め、また適宜句読点を補った。

### 満韓視察 漱石

視察所ぢやない、空<sup>びだ</sup>に遊んで来たのだから話す程の事もありませぬ。行つた先は哈爾濱<sup>ハルビン</sup>まで。此の度旅行して感心したのは、日本人は進取の氣象に富んで居て、貧乏世帯ながら分相應に何処までも發展して行く<sup>と</sup>云ふ事実と、之に伴ふ経営者の氣概であります。満韓を游歴して見ると、成程日本人は頼もしき国民だと云ふ氣が起ります。従つて何処に行つても肩身が広くて、心持が好い<sup>です</sup>。之に反して支那人や朝鮮人を見ると、甚だ氣の毒になる。幸ひにして日本人に生まれました故、幸福だと思ひました。モ一つ感心した事は、彼の地で経営に従事して居るものは皆熱心に其の管理の事業に従事して、自己の挙げた成功に対して皆満足の態度を以て説明して呉れる事<sup>であります</sup>。幾多の人に逢つて色々の話をして見ましたが、悲觀したり絶望して居るものは一人もない様<sup>でした</sup>。悉く愉快に執務して居る様に見受けました。夫もその筈です。炭砒は炭砒、園芸模範場は園芸模範場、人參製造所は人參製造所、印刷局は印刷局、埠頭は埠頭、鐵道營業所は鐵道營業所、皆夫々の方面に於て自分の意見の行はれたものは、日々<sup>に</sup>成功して行くのみならず、其の成功に対する報酬が内地の倍以上に高価にあるから、徒ら<sup>に</sup>郷土病に罹るものゝ外は男子会心の事業とし

4) 1993年12月より新しい『漱石全集』全28巻別巻1が岩波書店より逐次発刊の運びとなる。が本稿は1993年10月現在の岩波書店版『漱石全集』をテキストとする。

て、又安んじて其の職を尽さざるを得ないのだらうと思ひます。

安奉線を経過して安東県に出ると経営振の差異が著しく目につきます。満州の経営は外部から見ると日本の開化を一足飛に飛越して直に泰西の開化と同等の程度のもを移植しつゝある様に見えます。だから日本内地の文明が行渡りもせぬ中に、巍然<sup>きげん</sup>として宏壮なる建築がポツリポツリと広い場におつ立てられると云ふ様な不揃なハイカラで押通して行きます。是は資本が満鉄と云ふ一手に在つて、成程満鉄だけは西洋と対抗し得るハイカラな真似が出来るが、其の他の資本主は甚だ微弱なもので、到底普通の内地の中程度にも及ばないと云ふ意味であります。処が安東県に来て日本街を見渡すと一寸驚くのです。町並みが一通り揃つて居る（純日本式に）。換言すれば富の分配が一様に行はれて居る。けれども其の分配率は低度なもので、之を一所に集めても満鉄の経営に係る奉天の病院の様なものは立てられまいと思ふ位です。家並は揃つて居るが、まア根津の新開地位の所であります。平壤に行くとき思ひが一層強くなります。京城に行くとき朝から隣で謡の先生が謡を教へたり向ふで三味線の稽古をして居る様な始末<sup>ちよつと(ママ)</sup>で一寸内地と違ひませぬ。釜山に行くとき夫が極端になり相<sup>まう</sup>です。一言で言ふと、朝鮮に於ける日本の開化は歲月の力で進んで南方から北の方へせり上げて行つたもので、満州の方は分限者が思ひ切つて人工的に、周囲の事情に関係なく、高層の開化を移植しつゝある、と見れば間違ひはないでせう。私はどち<sup>どち</sup>が宜いと云ふのぢやない、此の二つが歲月と富力に束縛されて、斯<sup>か</sup>う著しく分配して発展するのを面白く感ずるのであります。但日本流の暖国の開化は安東県まで北進するのでさへ已に無理であります。彼<sup>あ</sup>のまま尚北へ押し行けば氣候の為に辛い目に遭ふことだらうと信じます。是れ位にして置ませう。

以上がその一文書の全文である。これなどは前節で概観した先行研究の、前者の言う“帝国主義者”“植民地主義者”漱石の一面がよく出ている例の一つとみなせるかもしれない。そのように重要なテキストが今まで何故日の目をみなかったのか。というのは、既に二十年も前に米田利昭氏が、この資料の存在を、「漱石の満韓旅行」（『文学』1972.9. 岩波書店）の中で紹介しているからだ。但し、それは、明治42年10月18日付の『東京朝日新聞』について、である。

ところが、このテキストを確認しようとして、マイクロフィルムをその画面に読み取ろうとしても、浮かび上がってこない。これは朴裕河氏が「漱石『満韓ところどころ』論」（『国文学研究』第104集）で指摘しているように「私の確認したかぎりでは

『東京朝日新聞』にはそのような資料は見当たらなかった。」というのにはまちがっていない。そこで同月同日付の『大阪朝日新聞』を、またマイクロで読み取ると、今度は「満韓視察」という見出しで、掲載されている<sup>5)</sup>。

何故このようなことになっているのか。この妙な事実関係のねじれを教えてくださいるのは、やはり岩波書店の全集編集者の中村寛夫氏である。それによると、国会図書館の原紙にははっきりと「満韓の文明」のあることを確認<sup>6)</sup>。マイクロフィルムの方は「第二版」の紙面を採ったが、実は「満韓の文明」は「市内版」に掲載されていたのだった。

ともあれここで、10月18日付で『東京・大阪朝日新聞』に漱石の〈満韓旅行〉の報告が掲載されているとなると、『全集』十四巻に収録されている大阪朝日新聞主筆の鳥居赫雄（素川）宛書簡の「十月末 [?]」という推定の日付はもう少し前に持つてくる必要が生じよう。この書簡の後半の「此度旅行して感心したのは」以下は、この「満韓の文明」即ち「満韓視察」と同文だからである。つまり、ある記事を先に新聞社に渡し、その記事を傍らにして私信を綴る、というよりは、手紙の形をとって記事を送った、と見る方がこの場合合理的だからだ<sup>7)</sup>。事実、上記の鳥居素川宛の文書は「漱石山房原稿用紙」に書かれているとある。これもまた一つの推定にしか過ぎないが、書簡というよりは新聞の記事として送った漱石の記事を、抄録として掲載したのではないか。だとすれば、この書簡は馬関到着の10月14日以降で、なおかつ大阪で「朝日社」に素川を訪ね、不在のため置き手紙をした15日以降と絞られてこよう。何故なら、会うことにしている人間に帰ってきたことの報告を兼ねた手紙を出すことは不自然だからである。そこで、18日の新聞記事に間に合うためには、少なくとも前日には着いている必要がある。このように考えてみると、15、6日がこの書簡の日付としては一番ふさわしいように思われる。

ともあれ、ここではこのテキストが、漱石のアジア観を知る一資料として、考慮で

5) 別冊國文學No.39『夏日漱石事典』(平2.7. 學燈社)「満韓旅行」の項で尹相仁氏も『大阪朝日新聞』でこの記事を確認している。

6) 但し「満韓の文明」の方には「▽昨日帰朝せる漱石氏談」とあり、第二段落の冒頭には「満韓二国に於ける日本の差異ですか」が置かれている。その他若干の違いが散見される。

7) 註6)で示したように、「満韓の文明」の記事には確かに「昨日帰朝せる漱石氏談」とある。『東京朝日』の方は17日に帰った漱石から「談話」を取り、翌日の新聞に載せることは可能だろうが、では『大阪朝日』の方はどうしたのだろうか。ここは、寧ろ『大阪朝日』の方が先に原稿を入手していた、そして漱石は手控えの草稿を元に『東京朝日』の「談話」に及んだ、と考えてもおかしくはない。その手控えの草稿は『全集』14巻所収の「満韓視察談」ではなかったか。但し、ここでいう「談話」とは、原稿の口伝えに近いものであると思われる。

きるか否かを確認すれば足る。

## 2. 満韓旅行

漱石は、明治42年9月2日、東京を出発し、約一月半近くの「満州朝鮮」への旅にでかける。『満韓ところどころ』はこの旅行中、囑目に触れたものを題材として、執筆された、いわば紀行文である、と一応は言うことができるだろう。但し、この作品は極めて中途半端なものであり、行程半ばの撫順の炭坑で、その叙述は終わっている。いまこの旅行先を、『南満州鉄道案内』<sup>8)</sup>(明42.12.25 南満州鉄道株式会社)の観光紹介と比べてみよう。

若しそれ沿道各地の観光を行はんか、先づ大連より旅順に至りて要塞激戦の跡を偲び、南山に登りて奥軍勇士の魂を弔し、(略)熊岳城及湯崗子の温泉に旅塵を洗ひ、千山に攀ちて神斧鬼工の奇勝、唐碑、寺観の古雅を探り、営口に商工業及交通運輸の状勢、遼河流域の南満州に貢献する利便を察し、遼陽奉天に古来治乱興亡の跡を鑑み、撫順支線に入りては豊富なる炭層、明の撫順城址を訊ね、と、あたかも漱石の〈満韓旅行〉の案内をしているかのごとき記述がなされている。同『案内』は続けて次のように奉天—安東県(鴨緑江河口)の紹介する。

安奉支線に至りては沿線溪山の奇勝我耶馬溪に優ると称され、夏事の新緑秋後の紅葉過客をして恍として身の仙境にあるを覚えしむ、且一山一丘尽く日露戦役の新戦場ならざるはなく、憑弔感慨の趣亦殊に深し、

漱石の方は、奉天からそのまま東北上へ進み、ハルビンまで行ったあと、また引き返して奉天から朝鮮へ向っている。がその間の車窓からの風景の趣は上記のような雰囲気である。以下、『案内』は鉄嶺、長春、と紹介の筆を運んでいる。この『案内』は、漱石の旅行より二月後に出版されているので、携行することはできなかったはずだが、見比べてみると、漱石の満韓旅行とは極めてありふれた、名所旧跡巡りの観光旅行だったことがわかる。

## 3. 漱石における《朝鮮》

岩波書店版『漱石全集』の索引(第18巻)に「朝鮮」あるいはそれに関する語彙

8) 大阪府立中之島図書館蔵。

として掲げられている例は全部で106例ある。これらの中で頻出しているのは、『明暗』であり、また『満韓ところどころ』とそれに伴う『日記』『書簡』の類である。これらに、先に言及した「満韓視察」（「満韓の文明」）を全て抜き出して、改めて検証してみると、次のような特徴が浮かび上がってくるように思われる。

- (1)小説作品中では、「内地」に居られない者が都落ちして行く所であり、また一旗あげる冒険者の行く所、という暗いイメージで登場して来ている。（『門』『彼岸過迄』『明暗』等）

この点についてはやはり『明暗』の小林が何度も語る〈朝鮮〉像が最も鮮明である。「朝鮮三界」（八十二）「遠い朝鮮」（百五十一）等々、最果ての地であることが強調されている。また『門』の小六も将来の見込みのないのにいられ、「一層今のうち、満州か朝鮮へでも行かうかと思ってるんです」と、安井や坂井の弟の辿った道へ思いを馳せて行くのである。また『彼岸過迄』の敬太郎も「刺激」を求めている求職中の青年である。実際はさほど遠くもないはずの〈朝鮮〉は、恐らく〈日本〉という概念の辺境にある地、という文脈の中にあるのではないか。

- (2)ところが、これが、書簡や日記、あるいは談話や随筆になると、景色の好い所であり、風雅な人々のいる所、という小説世界とは違った他明るい色調でイメージされてくる。

例えば、『満韓ところどころ』の数々の大空や風景の描写、あるいは「京城は山があつて松があつて好い処だ。」（明42.10.9. 野村伝四宛書簡）といった感覚、あるいはまた「旅行なれざる小生の眼にも風景のよき処は欧州満韓」（大2.7.? 時事新報社宛書簡）等々である。一度も行ったことのない地を観念的なイメージとしているわけでもないはずの、〈満韓旅行〉後の小説作品の世界と、この好感を示す言説との落差は何に起因するのだろうか。それは、やはり小説という観念上の虚構の空間での位置と、現実の眼で見た実感との違いであろうと、思われる。

- (3)これら漱石の〈朝鮮〉への全発言の中で、その情動的な関わりを解くキーワードは、多分〈同情・気の毒〉というタームであると思われる。

こうした心情の傾向は既に「倫敦消息」（明34.5.『ホトトギス』）に登場している。それは、西洋の新聞記事の紹介に関してであり、魯国が「朝鮮で雌雄を決するがよからう」と主張しているのに対して「朝鮮こそ善い迷惑だと思つた」（一）という言い方である。あるいはまた小宮豊隆宛書簡（明40.7.19）では、次のようにその胸中が吐露されている。

朝鮮の玉様(マツ)が讓位になつた。日本から云へばこんな目出度い事はない。もつと強



硬にやつてもいい所である。然し朝鮮の王様は非常に気の毒なものだ。世の中に朝鮮の王様に同情してゐるものは僕ばかりだらう。あれで朝鮮が滅亡する端緒を開いては祖先へ申し訳がない。実に気の毒だ。

この書簡の背景には、韓皇帝がオランダのハーグで開かれる第二回万国平和会議に、自身の信任状を持たせて密使を送り、日本の侵略を全世界に訴えようとした、所謂「ハーグ密使事件」の結果、朝鮮統監府の伊藤博文統監によって韓皇帝高宗（在位1863年～1907年）が退位させられた経緯がある。これは、明治40年7月19日のことである。漱石が同日付の書簡で即、対応している点はやはり、その関心の深さを窺わせるものであろう。ここには明確に漱石の二様の見方が、象徴的に表出している。つまりここでの「日本」という立場は、恐らく明治国家と言い換えてもいい、一種の運命共同体を意味していると思われる。その観点からは「もつと強硬にやつてもいい」という意見が行われる。がしかしまた、その立場をもう一方に移すときには「気の毒」に思い、また「同情」の念が起る。このような一見矛盾する考え方の在りようを、外から説明することは難しい。だが、その難しさの危険をあえて冒すとすれば、次のように言ってもいいだろうか。すなわち、西洋、対、日本、という図式において、西洋を向こうにまわした、急速な俄普請の明治国家の建設にあたっては、明治人の一員としては国益の増す「日出度い事」であろうが、しかし同じ東洋の中にあっては、あたかも貧人がより貧人の財物を掠めるがごとき「気の毒」と「同情」を禁じ得ないのだ、と。無論この、東洋の中、には漱石の文人趣味もあり、また他人事とは思えぬ人情の湧きいでる個人的な場も含まれよう。

このように相矛盾するように見える在り方は、ユーモアを交えた諧謔的文脈の中では、例えば次のようにも表される。それは『虞美人草』を難しいという世評に対して、わからなければ黙っていればいいものを「余計な事をいふ奴は朝鮮国王の徒だ。況んや漱石先生に如何程の自信あるかを知らずして、妄りに褒貶上下して先生の心を動かさんとするをや」（明40.8.3付 小宮豊隆宛書簡）。ここで比喻として用いられている「朝鮮国王の徒」という一句を以て、「帝国主義者」と論うわけには、いけないのは当然である。

#### 4. 韓国観光団

さて、前節を引き継ぐ形で、もう少し漱石の関わり方を見てみたい。特に注目されるのは、〈満韓旅行〉に極めて近い、『日記』（明42.4.26）の一条である。

韓国観光団百余名来る。諸新聞の記事皆軽侮の色あり。自分等が外国人に軽侮せらるゝ事は棚へ上げると見えたり。／もし外国（西洋）人の観光団百余名に対して同一の筆致を舞はし得る新聞記者あらば感心なり。

一体ここで言われている「韓国観光団」とはなんであり、またどのように「軽侮の色」があるのだろうか。明治42年4月23日付の『東京朝日新聞』に、「観光団の七元老」という見出しで次のような人々の紹介がなされている。

- (一) 閔泳韶 正一位大勲輔国の地位に在り韓皇室とは親近なる姻戚の關係を有し現に前後（前後即ち前皇后の意か一引用者）閔妃は氏と叔姪の間柄にして謹直の君子人なり
- (二) 金宗漢 「嘗て宮内大臣たり」（なお「 」は一部引用を示す。以下同じ）
- (三) 李容植<sup>9)</sup> 「前学部大臣にして」
- (四) 李重夏 「外務大臣たりしこと数次」
- (五) 朴容大 「事務に精通」
- (六) 李軒卿 「前列書（大臣）たりしことあり」
- (七) 閔炯植 「前統制使にして我国の師団長中將相当官たりき」

これによれば、ただ単なる“観光ツアー”の一団というのではないことがわかる。あたかも日本における明治初年の「米欧派遣使節団」の一行にも似た、錚々たる「元老」たちの一団である。

ではそれを、新聞はどのように「軽侮の色」で見ているのだろうか。『東京朝日新聞』に掲載された、漱石の『日記』と同じ明治42年4月26日付の、「王子における観光団」の記事を読んでみよう。まず、「王子製紙製絨場」で羊毛から羅紗ができる流れ作業を見学した際の記事である。

汚き羊毛が遂に純白或は紺或は茶等の麗しき羅紗となりて巻取らるゝの早技を見せられ一行は唯パチクリパチクリと眼を睜るのみ殊にミユール、目だし、機織場の如き轟々百雷を聞くに等しければ如何に沈静なる韓客も或は伸びてシャフトの回転早きに驚き或は伏して目だし作業の巧妙なるを賞し

如何に日本が優れた技術をもっているか、とその“最新鋭”の設備と機械を誇らしげに叙し、〈遅れた〉国からやってきた「韓客」の驚きの様子を述べている。記事は更に次のように続いていく。

9) 『朝鮮人名辞典』（昭12.3. 朝鮮総督府中枢院）の「補遺」の項によれば、この李容植はこの後「大正八年不逞鮮人に擁せられて独立騒擾に加はり爵位を褫奪せらる」とある。硬骨の士であったようである。

殊にミュールの如き一列二三十間に余るつむ鍾が一進一退兵式調練の形を為し工女服着たる可憐の少女が其の間を奔走して而かも巧みに機械と共に進退するなどは尠ならず彼等の好奇心を挑発したり

機械に合わせて人間がその間を「奔走」している様は、確かに「好奇心を挑発」するだろう。だがその「好奇心」は、二十世紀の末にある現代人の「好奇心」である。しかし、明治近代の日本人は、誇りにその〈近代化〉の成果を、アジアの〈遅れた〉隣国に胸を張って示している。一行が「蠶業講習所」を見学すると、「何れもその設備の整頓せるに驚けるものゝ如し」(同上記事)となり、また「渋沢男邸の招宴」で渋沢男爵は次のように挨拶している。

諸君が短時日に此東京に來りし便利なる交通機関も全く実業発展の結果にして実業の発達は實に日韓兩國の欠くべからざる連鎖たることを記憶せられよ

現代人の感覚から言えば果たして「便利なる交通機関」だったかどうか、などというつもりはない。さらに、ここで殊更“現代人”と言うのは、過ぎ去った昔を、「今」という言わば〈神の視点〉で事挙げする、つまり「近代主義」のためではない。当時、既に地下鉄さえもあった、世界の最先端を行く第一流の大英帝国に、文部省から派遣された留学生として、つぶさにその西洋文明を目のあたりにした経験をもつ漱石の視点というものを問題にしたいからに他ならない。科学技術の進歩のみが、〈近代化〉だとは限らぬが、この記事に即して問題を単純化して言えば、機械と技術の〈近代化〉とは、直線が目盛りの長短で計測し得るものであろう。その限りで言えば、例えば、空間的に隔たった英国・倫敦と日本・東京との落差は、時間系列の早遅に置き換えることができよう。つまり、漱石の視点というものの感覚をこちら側に取り込もうとしたら、いわゆる「現代人」のそれを跳躍台に用いればよいことになる。

恐らく、漱石の目にはこのような類の自国賛美は、東洋という井戸のなかでのみ通用する蛙の自慢話にしか映らなかった、と思われる。「もし外国(西洋)人の観光団百余名」が訪日した際には、日本の現状はどのような様子に見えたであろうか。当時の日本の水準は、全く別の意味で「彼等の好奇心を挑発」したことであろう。

以上、明42年4月26日付の漱石『日記』の一条にこだわったのは、ここに漱石の〈相対認識〉がよく象徴されている、と思われるからである。漱石には西洋(英国)と日本との間に横たわっている、目も眩みそうな深々とした溝が見えていた。しかし、その“溝”は一足先に〈開化〉の先鞭をつけた日本と、アジアの他国との間にも截然と見えるものであったはずだ。このような漱石の〈相対認識〉の眼差し、言わば〈複眼〉的な視点、を持って〈開化〉というものを考えていたのだったとしたら、果たし

て漱石は、「植民地主義者」と呼べるのだろうか。

## 5. 漱石の『満韓ところどころ』とは何だったのか

では、このような点から改めて『満韓ところどころ』について考えてみたい。漱石の作品中これ程悪評の高い作品も珍しい。一体この紀行文（随筆）はどのような作品なのだろうか。檜山久雄『魯迅と漱石』<sup>10)</sup>は「日露戦争以後はっきり帝国主義段階に突入した日本の歴史の進行から、漱石といえどもまったく自由ではなかった」と述べ、「彼は、彼自身のうちにまで浸透する帝国主義的ナショナリズムにどこまで気づいていたかはわからないが」と記している（第2章・三）。確かに、ここで漱石は、歴史の歯車の下で日本帝国主義の搾取の対象となりつつあった「満韓」の悲惨な人民大衆の現実に呼応する形で敢然とその解放闘争に決起すればよかった、……のだろうか。「八百屋」には「八百屋」の行き方があり、「魚屋」には「魚屋」の商売の仕方があるはずだ。誰でも、また彼でも、売るものはただ一つ、という世の中とは、どのような社会なのであろうか。

むしろ、漱石という男は徹底的に伝統を重んじ、「義理と人情」の古い世界の住人だったと考えておいた方がいいのだ。だからこそ、浅薄な西欧化、即ち近代化に違和感を持ち、批判できる眼を持っていたと言えよう。ともあれこの作品の性格、方法、そして視点といったものについて考えてみたい。

そもそもこの旅行は何故始められたのだろうか。その経緯は詳らかではないが、平野清介編著『新聞集成夏目漱石像』<sup>11)</sup>の記事によれば、8月中旬にはまだその計画は具体的ではないようである（明42.8.12 国民）。それが下旬になると「▲夏目漱石氏は小説『それから』を既に脱稿したれば近々満韓地方漫遊の途に上るべしと云ふ」（明42.8.22 国民）と伝えている。また『日記』によれば、7月31日に、七年振り、学生時代の親友中村是公が訪ねてきて、「満州に新聞を起すから来ないかと云ふ。不得要領にて帰る。近々御馳走してやると云つた。」という。「それから」の脱稿が8月14日であり、8月18日には出発することに最初は決めてあった。それが9月2日に延びたのは「胃カタル」のためである。このように辿ってみると、漱石の〈満韓旅行〉には、「それから」脱稿後の気分転換の旅、といった印象が強い。こうした背景をもつ一ヵ月半の旅は、その背景からして、倫敦留学の孤独な旅とはかなり異質なものと

10) 本稿「はじめに(2)先行研究について」の項参照。

11) 『新聞集成 夏目漱石像』1（昭54.1. 明治大正昭和新聞研究会）。

ならざるをえなかったであろうと思われる。その上に立ってこの作品を考えてみるといくつか特徴のある点が浮き彫りされてくるように見える。

先ず第一には今述べたように、友人に誘われ一種の気分転換の旅であった、ということである。相馬庸郎氏は「漱石の紀行」<sup>12)</sup>で「フィクショナルに展開してみせた『草枕』の旅を、同じ精神構造で現実に実行してみようとしたのではないか。」と読んでいる。確かに、ここには重厚長大な漱石の姿は隠れているように見える。

恐らく、強いて旅の目的を掘り出すとすれば、それは、海外におけるにおける〈日本人〉に焦点があったといえよう（『満韓ところどころ』一、あるいは明42.11.28付寺田寅彦宛書簡）。とすれば、長塚節の『土』に描かれた農民の悲惨な生活を読むことを自分の娘たちに奨めた『『土』序文』の目とは、その位置がやや移動していると考えられよう。

そして、その『『土』序文』の中で『満韓ところどころ』にふれて漱石は次のように述べている。

長塚君の書き方は何処迄も沈着である。其人物は皆有りの儘である。話の筋は全く自然である。(略)長塚君は余の「朝日」に書いた『満韓ところどころ』といふものをSの所で一回読んで、漱石といふ男は人を馬鹿にして居るといつて大いに憤慨したさうである。(略)成程真面目に老成した、殆ど嚴肅といふ文字を以て形容して然るべき「土」を書いた、長塚君としては尤もの事である。『満韓ところどころ』杯が君の気色を害したのは左もあるべきだと思ふ。然し君から輕佻の疑を受けた余にも、真面目な「土」を読む眼はあるのである。だから此を書くのである。長塚君はたまたま「満韓ところどころ」の一回を見て余の浮薄を憤つたのだらうが、同じ余の手になつた外のものに偶然眼を触れたら、或は反対の感を起すかも知れない。もし余が徹頭徹尾「満韓ところどころ」のうちで、長塚君の気に入らない一回を以て終始するならば、到底長塚君の「土」の為に是程言辭を費やす事は出来ない理屈だからである。

下線部を辿ってみると、この文章は二項対立によって成り立っているのがわかる。沈着で有りの儘でその上真面目であり且つ嚴肅な「土」と、輕佻で浮薄な「満韓ところどころ」という図式である。確かに、「彼等の獸類に近き、恐るべき困憊を極めた生活状態」(同「序文」)を描いた「土」の底辺からの眼差しによって、仮に照射されたとすれば、この『満韓ところどころ』などは、作者本人にとってみても「輕佻・浮

12) 『国文学』(昭43.2. 学燈社)。

薄」な作品と映ったことであろう。では何故このような〈軽佻・浮薄な作品〉となったのだろうか。その一つの理由は先に述べたように、「満韓」の底辺の民衆ではなく、「日本人」に焦点があてられていたから、と考えられよう。しかし、この所謂「軽佻浮薄」のよってきた理由はそれだけではない。むしろ、選り取られた創作の方法こそその理由が秘められているようなのだ。

ではこの『満韓ところどころ』を執筆するにあたって取られた創作上の方法とはなにか。既に幾つかの論の中で指摘されていることだが、この作品は『吾輩は猫である』や『坊っちゃん』の文体が取られているのではないかと、という見方である。この見方の根底には「写生文」の理論がある。漱石は「写生文」（明40.1.20付『読売新聞』）という一文でその立場を次のように説明している。

夫では人間に同情がない作物を称して写生文家の文章といふ様に思はれる。然しさう思ふのは誤謬である。親は小児に対して無慈悲ではない、冷刻でもない。無論同情はある。同情はあるけれども駄菓子落とした小供と共に大声を揚げて泣くような同情は持たぬのである。

写生文家の人間に対する同情は叙述されたる人間と共に頑是なく煩悶し、無体に号泣し、直角に跳躍し、一散に狂奔する底の同情ではない。傍から見て気の毒の念に堪えぬ裏に微笑を包む同情である。冷刻ではない。世間と共にわめかない許である。

従つて写生文家の描く所は多く深刻なものではない。否如何に深刻な事をかいても此態度で押して行くから、一寸見ると底迄行かぬ様な心持ちがするのである。しかのみならず此態度で世間人情の交渉を視るから大抵の場合には滑稽の分子を含んだ表現となつて文章の上にはあらはれて来る。

ここに繰り返し述べられている〈同情〉、そして〈気の毒〉という語彙は、本稿「3. 漱石における《朝鮮》」の項で触れたところのものである。この一文は〈満韓旅行〉よりも二年ほど前に書かれたものではあるが、あたかも『満韓ところどころ』の創作方法の秘密を暗示しているかのごとき文章である。先の、長塚節の批判を先取りしているかのような一節がある。続けて、引用してみよう。

人によると写生文家のかいたものを見て世を馬鹿にしてゐると云ふ。茶化してゐると云ふ。(略) 多少の道化たるうちに一点の温情を認め得ぬものは親の心を知らぬもので、又写生文家を解し得ぬものであらう。

上述の『土』序文』の中で言われていた「漱石といふ男は人を馬鹿にして居るといつて大いに憤慨したさうである」長塚節の言葉を既に先取しているかのように、妙

に照応する一句である。更に漱石は説明を進めて行く。即ち、「写生文家は地団太を踏む熱烈な調子を避ける」、そのため「真面目に人世を観じて居らぬかの感が起る」が、しかし「何となくゆとりがある。逼つて居らん」という感じがするのだという。まさに、『満韓ところどころ』が「軽佻・浮薄」であり、中国人を「チャン」と呼んでいるので「差別意識」を持っていた、といった、同時代と後世の批評に対して、予め附置されていた一文のように思われるほどである。

では、確かに、一場面一場面において生み出された「滑稽」はわかるとしても、この「写生文」の手法は、単にそれだけのものだったのだろうか。実はその「滑稽」と「道化」の分子には、「橋本と余」による《膝栗毛風の弥次喜多道中》が目論まれていたためだったのではなかったか。「橋本左五郎」が登場して来るのは「十三」からであるが、それ以前から、満鉄総裁中村是公にしる、大連税関長立花政樹にしる、また旅順警視総長佐藤友熊にしる、書生時代に戻ることににより、「揃いも揃った馬鹿の腕白」(十四)として描写されている。そもそも「三」において、「身をかわすのかわすと云ふ字」を知らない「余」の姿が描かれているが、何故そのような無知な文学者の一面を記す必要があったのだろうか。それはやはりこの作品が、戯作的要素を要求している顯れではなかったか。

このように考えて来ると、この『満韓ところどころ』の中で、数々落としめられている、現地中国人の登場をもってして、果たして、針生一郎氏「明治文学における自我と民衆」(『文学』1976.7.)のように、

日本帝国主義の先兵としての満鉄の役りにも、抑圧と搾取のもとにある中国民衆の状況にも、鈍感で無知な感想をならべている(2)

そのような漱石として受け取っていいのか、どうか。無論、漱石が所謂「帝国主義的」な回路を持っていたとしても、また「植民主義的」な支配者の意識で「満韓」の人々を視ていたとしても、それはそれとして、我々はそこから何事かを〈学べる〉はずだ。しかし〈学ぶ〉ためには、その回路と意識の測量は慎重でなければならない。

ともあれ、この『満韓ところどころ』の四つ目の特徴として、文人趣味的視点、を上げることが出来よう。例えば、黙々と豆を担いでぶちまけてまた担ぎに行くクーリーたちを見て、「余は不図漢楚軍談<sup>13)</sup>を思ひ出した」といい「昔韓信に股を潜らした豪傑」の姿を描いている(十七)。あるいはまた「三十三」では共同風呂(『日記』では

13) 大正6.4. 発行、『通俗漢楚軍談』(有明堂文庫)の校訂者石川核の「緒言」には「通俗漢楚軍談十五巻は、漢楚興亡の事蹟を叙したるものにして、古来通俗三國志と相並びて、支那軍談物の双璧と称せらる。(中略)作者夢梅軒章峯は元禄時代の人、伝詳ならず。」とある。

熊岳城)のほとりで、河岸の柳と牛と馬の風景を見て「凡てが世間で云ふ南画と称するものに彷彿として面白かった」と述べている。そして梨島の主人(『日記』では韓文)の家の木に繋がれている「騾馬を見るや否や、三国志を思ひ出した。何だか玄徳の乗った馬に似てゐる」(三十六)という感想をもらす。さらに、温泉で有名な湯岡子へ夜着いたときの様子を「魏叔子の大鉄椎の伝にある曠野」と連想している(四十二)。奉天では大きな門を見上げて「久し振りに漢詩といふものが作りたくなつた」という「興趣」を覚えている(四十六)。

このような把握の仕方は、鏡子夫人<sup>14)</sup>の言を俟つまでもなく、東洋趣味的と言ってもいいのだろうが、しかしこの視点からは、長塚節の『土』は生まれえない。そして漱石はこの点をよく知っていたはずだ。

ところで、この『満韓ところどころ』は「漱石ところどころ」と言われる<sup>15)</sup>ほど、旧知の人々が登場している。この漱石の旅は言わば、友人・知人・親戚巡りの旅、と見てもいい程である。しかもその人々は現地において如何ようにも便宜をはかることのできる位置にいる実力者ではなかったか。先にも触れたように、親友中村是公は満鉄総裁であり、立花政樹は大連税関長、さらに佐藤熊友は旅順警視総長という、それぞれ“日本帝国主義の先兵たる機関の責任者”であった。また、「余」と〈膝栗毛〉の旅をともにする橋本左五郎は満鉄の依頼により蒙古の畜産調査を行なって来た東北大学の教授、という陣容である。『日記』によるとこの後京城では鏡子夫人の妹婿・鈴木禎次の弟である鈴木穆<sup>しづか</sup>に世話になるが、彼は例の、「朝鮮総督府」の度支部長<sup>16)</sup>であった。まだこの他にも旅順の民政署長官である白仁武は、門下生坂元雪鳥の兄であり、また『猫』の多々羅三平のモデルと言われて迷惑したという、五高時代の元書生股野義郎もいる。一体このことは何を意味しているのか。便宜という点においては寺田寅彦宛「書簡」(明42.11.28付)にあるように「アリストクラチック」な旅であったし、また心情的には、旧友たちとの再会による懐古の想いを味わった旅でもあった。

以上、この『満韓ところどころ』をめぐる取り出した要素を確認すると次のようになろう。即ち、この旅はあらかじめ準備されたものではなく、一種の気分転換の旅

14) 夏目鏡子、松岡譲筆録『漱石の思い出』の「三六 満韓旅行」の項参照。

15) 小宮豊隆『夏目漱石』(昭13.7.)の「五五 満韓旅行」の項参照。

16) 註14)に「総督府の度支部長をしてらした鈴木穆さん」とあり、確かに、明42.10.9付の鏡子夫人宛書簡にも「朝鮮京城旭町総督府官舎」とある。が「総督府」の置かれたのは、明治43年8月29日からである。実際は「統監府」とあるべきところか。なお「度支部」とは『京城史』第2巻(昭11.3.京城府発行)、あるいは『朝鮮総督府官制とその行政機構』(昭44.11.友邦協会)等によれば、「大臣官房」「司税局」「司計局」「理財局」「臨時財源調査局」を統括している官庁である。



として置かれていた。本稿「2. 満韓旅行」で見たように、漱石の旅は、観光案内の名所旧跡を辿るものであった。そこに、強いて目的らしきものがあつたとすれば、それは現地における「日本人」を見ることだったと言えよう。また、その執筆の方法が「写生文」的であり、就中《膝栗毛風の弥次喜多道中》が目論まれていたとしたら、当時の「現実」そのものに密着することはないだろう。その上そこに東洋的文人趣味の視点が加わるとなると、現地の「現実」は遥かに後景へと退くこととなる。おまけに、この旅が友人知人親戚巡りの旅の性格を持っているとなると、現代的な“歴史上の善悪”の判断からは、きわめてもの足りない見方をした作品ということになると思われる。このように辿って来ると、本稿の冒頭で概観した先行研究の中の従来の否定的な論拠というものは、もう一度考え直さなければならないように思われてくるのである。

## おわりに

此汽車の悪さ加減と来たら格別のもので普通鉄道馬車の古いのに過ぎず。夫で一等の賃銀を取るんだから呆れたものなり。乗つてゐると何所かでぎしぎし云ふ。

(略)

小さな汚い部屋へ入れる。湯に入る。流しも来ず。御茶代を加減しやうと思ふ。

この『日記』の一節は〈満韓旅行〉での感想である。ただし馬関下船後、前者は大坂から京都へ向かう汽車のことであり、後者は京都の三条小橋の某宿屋に関してである(明42.10.15)。この言説から漱石の関西及び関西人への「侮蔑」が窺われる、としたらそれは考えすぎだろうか。それとも、交通機関の発達した東京から見たら、とても汽車とはいえない代物と思え、また宿屋も漱石の目からすると、「汚い部屋」と感じられたのだろうか。ともあれ、こうした感想にはさほどのレッテルが貼られないのはなぜか。

本稿の冒頭で述べたように、最初から結論の決まっている“研究”などは「研究」ではなく、単なる“政治”にしか過ぎない。われわれは「研究」と“政治”を混同してはならない。

さて、漱石の《朝鮮観》を追って、ここまでたどり着いた。後半で『満韓とところどころ』にややこだわったのは、従来の研究史と、また現在のある種の評価の仕方に疑義があるからに他ならない。漱石の思考の特徴として顕著なのは、物事の一例だけではなく、もう一面へもその視線が届いていることである。例えば、「朝鮮人を苦しめ

て金持ちとなりたると同時に朝鮮人からだまされたものあり」と京城滞在中の『日記』に認めている(明42.10.9)。一方の側から見れば、前半は“日帝の本質をとらえた言”として評価されるのだろう。が、では後半はどう考えればいいのだろうか。この後半だけを見ると「帝国主義的」漱石像が取り出されてくるのかもしれない。漱石の目はいつも複眼的であった。それは一どきに〈東〉と〈西〉を見渡すことのできる複眼的視線であり、それは言わば〈相対認識〉の眼差しとも言えよう。行文に「チャン」や「露助」(『日記』明42.9.23)が出てくることを以て「帝国主義」「植民地主義」といった冠詞で括らず、漱石像の全体の中で再検証してみると、この明治期にあって、やはり質の高い認識のレンズを持っていたと言えるのではなかろうか。

(佛敎大学文学部専任講師)